修禪寺物語（岡本綺堂）

（伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知れず。由來もしれず。木彫の假面にて、年を經たるまゝ面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懷してこの稿成る。）

登場人物
面作師　夜叉王
夜叉王の娘　かつら
同　かへで
かへでの婿　春彦
源左金吾頼家
下田五郎景安
金窪兵衛尉行親
修禪寺の僧
行親の家來など

（一）

伊豆の國狩野の庄、修禪寺村（今の修善寺）桂川のほとり、夜叉王の住家。藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶などかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔てゝ、塔の峯つゞきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。

（二重の上手につゞける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣に沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂廿歳。妹娘楓、十八歳。相對して紙砧を擣つてゐる。）

かつら　（軈て砧の手をやめる）一晌餘りも擣ちつゞけたので、肩も腕も痺るゝやうな。もうよいほどにして止めうでないか。

かへで　とは云ふものゝ、きのふまでは盆休みであつたほどに、けふからは精出して働かうではござんせぬか。

かつら　働きたくばお前ひとりで働くがよい。父様にも春彦どのにも褒められようぞ。わたしは忌ぢや、忌になつた。（投げ出すやうに砧を捨つ）

かへで　貧の手業に姉妹が、年ごろ擣ちなれた紙砧を、兎かくに飽きた、忌になつたと、むかしに變るお前がこの頃の素振は、どうしたことでござるか喃。

かつら　（あざ笑ふ）いや、昔とは變らぬ。ちつとも變らぬ。わたしは昔からこのやうな事を好きではなかつた。父さまが鎌倉においでなされたら、わたし等も斯うはあるまいものを、名聞を好まれぬ職人氣質とて、この伊豆の山家に隱れ栖、親につれて子供までも鄙に

そだち、詮事無しに今の身の上ぢや。さりとてこのまゝに朽ち果てようとは夢にも思はぬ。近いためしは今わたし等が擣つてゐる修禪寺紙、はじめは賤しい人の手につくられても、色好紙とよばれて世に出づれば、高貴のお方の手にも觸るゝ。女子とてもその通りぢや。たとひ賤しう育つても、色好紙の色よくば、關白大臣將軍家のおそばへも、召出されぬとは限るまいに、賤の女がなりはひの紙砧、いつまで擣ちおぼえたとて何とならうぞ。忌になつたと云うたが無理か。

かへで　それはおまへが口癖に云ふことぢやが、人には人それ〴〵の分があるもの。將軍家のお側近う召さるゝなどと、夢のやうな事をたのみにして、心ばかり高う打ちあがり、末はなんとならうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら　お前とわたしとは心が違ふ。妹のおまへは今年十八で、春彦といふ男を持つた。それに引きかへて姉のわたしは、二十歳といふ今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたら一生を草の家に、住み果つまいと思へばこそぢや。職人風情の妻となつて、滿足して暮すおまへ等に、わたしの心はわかるまい喃。（空嘯く）

（楓の婿春彦、廿餘歳、奥より出づ。）

春彦　桂どの。職人風情と左も卑しい者のやうに云はれたが、職人あまたあるなかにも、面作師といへば、世に恥しからぬ職であらうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開闢以來、はじめて舞樂のおもてを刻まれたは、勿體なくも聖徳太子、つゞいて藤原淡海公、弘法大師、倉部の春日、この人々より傳へて今に至る、由緒正しき職人とは知られぬか。

かつら　それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公といふ、その人々が尊いのぢや。彼の人々も生業に、面作りはなされまいが……。

春彦　生業にしては卑しいか。さりとは異なことを聞くものぢやの。この春彦が明日にもあれ、稀代の面をつくり出して、天下一の名を取つても、お身は職人風情と侮るか。

かつら　云んでもないこと、天下一でも職人は職人ぢや、殿上人や弓取とは一つになるまい。

春彦　殿上人や弓取がそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら　はて、くどい。知れたことぢやに……。

（桂は顔をそむけて取合はず。春彦、むつとして詰めよるを、楓はあわてゝ押隔てる。）

かへで　あゝ、これ、一旦かうと云ひ出したら、飽までも云ひ募るが姉さまの氣質、逆らうては惡い。いさかひはもう止してくだされ。

春彦　その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍してゐれど、あまりと云へば詞が過ぐる。女房の縁につながりて、姉と立つれば附け上り、やゝもすれば我を輕しむる面憎さ。仕儀によつては姉とは云はさぬ。

かつら　おゝ、姉と云はれずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に持つたとて、姉の見得にも手柄にもなるま

い。

春彦　まだ云ふか。

（春彦は又つめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちにて、父の聲。）

夜叉王　えゝ、騒がしい。鎮まらぬか。

（これを聽きて春彦は控へる。楓は起つて蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十餘歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の假面を打つてゐる。膝のあたりには木の屑など取散したり。）

春彦　由なきことを云ひ募つて、細工の御さまたげをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡くださりませ。

かへで　これもわたしが姉様に、意見がましいことなど云うたが基。姉様も春彦どのも必ず叱つて下さりまするな。

夜叉王　おゝ、なんで叱らう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩はまゝある事ぢや。珍らしうもあるまい。時に今日ももう暮るゝぞ。秋のゆふ風が身にしみるわ。そち達は奥へ行つて夕飯の支度、燈火の用意でもせい。

二人　あい。

（桂と楓は起つて奥に入る。）

夜叉王　なう、春彦。妹とは違うて氣がさの姉ぢや。同じ屋根の下に起き臥しすれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多からうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の公家衆に奉公したもの、縁あつてこの夜叉王と女夫になり、あづまへ流れ下つたが、育ちが育ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果るを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤とはいひながら、姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがへば親の愛も違うて、母は姉贔屓、父は妹贔屓。思ひ〳〵に子どもの贔屓爭ひから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。はゝゝゝゝ。

春彦　さう承はれば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌ひ、世にきこえたる殿上人か弓取ならでは、夫に持たぬと誇らるゝも、母御の血筋をつたへし爲、血は爭はれぬものでござりまするな。

夜叉王　ぢやによつて、あれが何を云はうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思はず、氣位高う生れたは、母の子なれば是非がないのぢや。

（暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈臺を持ちて出づ。）

春彦　おゝ、取紛れて忘れてゐた。これから大仁の町まで行つて、このあひだ誂へて置いた鑿と小刀をうけ取つて來ねばなるまいか。

かへで　けふはもう暮れました。いつそ明日にしなされては……。

春彦　いや、いや、職人には大事の道具ぢや。一刻も早う取寄せて置かうぞ。

夜叉王　おゝ、職人はその心掛けがなうてはならぬ。更けぬ間に、ゆけ、行け。

春彦　夜とは申せど通ひなれた路、一晌ほどに戻つて來まする。

（春彦は出てゆく。楓は門にたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、つゞいて源の頼家卿、廿三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をさゝげて出づ。）

僧　これ、これ、將軍家の御しのびぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

（楓ははッと平伏す。頼家主從すゝみ入れば、夜叉王も出で迎へる。）

夜叉王　思ひもよらぬお成とて、なんの設けもござりませぬが、先づあれへお通りくださりませ。

（頼家は縁に腰を掛ける。）

夜叉王　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。わが面體を後のかたみに殘さんと、さきに其方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず。幾たびか延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たることぢや。

五郎　多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其後已に半年をも過ぎたるに、いまだ獻上いたさぬとは餘りの懈怠、もはや猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌さんぐぢやぞ。

頼家　予は生れついての性急ぢや。いつまで待てど暮せど埒あかず、あまりに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉王　御立腹おそれ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用うけたまはりて已に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打ちましても、意にかなふほどのもの一つも無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家　えゝ、催促の都度におなじことを……。その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　この上は唯だ延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までにはかならず出來するか、あらかじめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王　その期日は申上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持てば、面はたやすく成るものと思召すか。家をつくり、塔を組む、番匠なんどとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打ち込む面作師。五體にみなぎる精力が、兩の腕におのづから湊まる時、わがたましひは流るゝ如く彼に通ひて、はじめて面も作られまする。但しその時は半月の後か、一月の後か、あるひは一年二年の後か。われながら確と

はわかりませぬ。

僧　これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるゝごとく、至つて御性急でおはします。三島の社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申上げてゐたら、御癇癖がいよ〳〵募らうほどに、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉王　ぢやと云うて、出來ぬものはなう。

僧　なんの、こなたの腕で出來ぬことがあらう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王　さあ、それゆゑに出來ぬと云ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と云へば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を、世に殘すのはいかにも無念ぢや。

頼家　なに、無念ぢやと……。さらばいかなる祟りを受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉王　恐れながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

（癇癖募りし頼家は、五郎のさゝげたる太刀を引つ取つて、あはや拔かんとす。奥より桂、走り出づ。）

かつら　まあ、まあ、お待ちくださりませ。

頼家　えゝ、退け、のけ。

かつら　先づお鎮まりくださりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう、父様。

（夜叉王は默して答へず。）

五郎　なに、面は已に出來してをるか。

頼家　えゝ、おのれ。前後不揃ひのことを申立てゝ、予をあざむかうでな。

かつら　いえ、いえ、嘘いつはりではござりませぬ。面はたしかに出來して居りまする。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かへで　ほんにさうぢや。ゆうべ漸く出來したと云ふあの面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜からうが、命も惜からう。出來した面があるならば、早う上様にさしあげて、お慈悲をねがふが上分別ぢやぞ。

夜叉王　命が惜いか、名が惜いか、こなた衆の知つたことではない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御。その面を持つて來て、兎もかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

かへで　あい、あい。

（かへでは細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取りて頼家の前にさゝぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる體なり。）

かつら　いつはりならぬ證據、これ御覽くださりませ。

（頼家は假面を取りて打ちながめ、思はず感嘆の聲をあげる。）

頼家　おゝ、見事ぢや。よう打つたぞ。
五郎　上様おん顔に生寫しぢや。
頼家　むゝ。（飽かず打戍る）
僧　さればこそ云はぬことか。それほどの物が出來してゐながら、兎かう澁つて居られたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝゝ。
夜叉王　（形をあらためる）何分にもわが心にかなはぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面をなんと御覽なされまする。
頼家　さすがは夜叉王、あつぱれの者ぢや。頼家も滿足したぞ。
夜叉王　あつぱれとの御賞美は憚りながらおめがね違ひ、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んでをりまする。
五郎　面が死んでをるとは……。
夜叉王　年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も云ひ、われも許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きたる色なく、たましひもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。
五郎　そちは左様に申しても、われらの眼には矢はり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。
夜叉王　いや、いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふがごとき、怨靈怪異なんどのたぐひ……。
僧　あ、これ、これ、そのやうな不吉のことは申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重疊、ありがたくお禮を申されい。
頼家　むゝ、兎にも角にもこの面は頼家の意にかなうた。持歸るぞ。
夜叉王　強て御所望とござりますれば……。
頼家　おゝ、所望ぢや。それ。
（頼家は頤にて示せば、かつら心得て假面を箱に納め、すこしく媚を含みて頼家にさゝぐ。頼家は更にその顔をぢつと視る。）
頼家　いや、猶かさねて主人に所望がある。この娘を予が手許に召仕ひたう存ずるが、奉公さする心はないか。
夜叉王　ありがたい御意にござりまするが、これは本人の心まかせ、親の口から御返事は申上げられませぬ。
（桂は臆せず、すゝみ出づ。）
かつら　父様。どうぞわたしに御奉公を……。
頼家　うい奴ぢや。奉公をのぞむと申すか。
かつら　はい。
頼家　さらばこれよりその面をさゝげて、頼家の供してまゐれ。
かつら　かしこまりました。
（頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつゞいて起つ。楓は姉の袂をひかへて、心許なげに囁く。）
かへで　姉さま。おまへは御奉公に……。
かつら　おまへは先程、夢のやうな望みと笑うたが、夢

のやうな望みが今叶うた。
（かつらは誇りがに見かへりて、庭に降り立つ。）
僧　やれ、やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王どの、あす又逢ひませうぞ。
（頼家は行きかゝりて物につまづく。桂は走り寄りてその手を取る。）
頼家　おゝ、いつの間にか暗うなつた。
（僧はすゝみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧にわたし、我は片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はぢつと思案の體なり。）
かへで　父さま、お見送りを……。
（夜叉王は初めて心づきたる如く、娘と共に門口に送り出づ。）
五郎　そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。
（頼家等は相前後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく默然としてゐたりしが、やがてつかゝと縁にあがり、細工場より槌を持ち來りて、壁にかけたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓はおどろきて取縋る。）
かへで　あゝ、これ、なんとなさる。おまへは物に狂はれたか。
夜叉王　せつぱ詰りて是非におよばず、拙き細工を獻上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのやうな面が將軍家のおん手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮夜叉王の名は廢つた。職人もけふ限り、再び槌は持つまいぞ。
かへで　さりとは短氣でござりませう。いかなる名人上手でも細工の出來不出來は時の運。一生のうちに一度でも天晴れ名作が出來ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。
夜叉王　むゝ。
かへで　拙い細工を世に出したをそれほど無念と思召さば、これからいよゝ精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。
（かへでは縋りて泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。）

（二）

おなじく桂川のほとり、虎溪橋の袂。川邊には柳幾本たちて、芒と蘆とみだれ生ひたり。橋を隔てゝ修禪寺の山門みゆ。同じ日の宵。
（下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は假面の箱をかゝへて出づ。）
五郎　上様は桂どのと、川邊づたひにそゞろ歩き遊ばされ、お供の我々は一足先へまゐれとの御意であつたが、

修禪寺の御座所ももはや眼のまへぢや。この橋の袂にたゝずみて、お歸りを暫時相待たうか。

僧　いや、いや、それは宜しうござるまい。桂殿といふ嬢女をお見出しあつて、浮れあるきに餘念もおはさぬところへ、我々のごとき邪魔外道が附き纏うては、却つて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎　なにさまなう。

（とは云ひながら、五郎は猶不安の體にてたゝずむ。）

僧　殊に愚僧はお風呂の役、早う戻つて支度をせねばなるまい。

五郎　お風呂とて自づと沸いて出づる湯ぢや。支度を急ぐこともあるまいに……。先づお待ちやれ。

僧　はて、お身にも似合はぬ不粋をいふぞ。若き男女がむつまじう語らうてゐるところに、法師や武士は禁物ぢやよ。はゝゝゝゝ。さあ、ござれ、ござれ。

（無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるゝまゝに、打連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。）

頼家　おゝ、月が出た。河原づたひに夜ゆけば、芒にまじる蘆の根に、水の聲、蟲の聲、山家の秋はまた一としほの風情ぢやなう。

かつら　馴れては左程にもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事變りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しうござりませう。

（頼家はありあふ石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまゝ、橋の欄に凭りて立つ。月明かにして蟲の聲きこゆ。）

頼家　鎌倉は天下の覇府、大小名の武家小路、甍をならべて綺羅を競へど、それはうはべの榮えにて、うらはおそろしき罪の巷、惡魔の巣ぞ。人間の住むべきところで無い。鎌倉などへは夢も通はぬ。（月を仰ぎて云ふ）

かつら　鎌倉山に時めいておはしなば、日本一の將軍家、山家そだちの我々は下司にもお使ひなされまいに、御果報拙いがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣での下向路、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家　おゝ、その時そちの名を問へば、川の名とおなじ桂と云うたな。

かつら　まだそればかりではござりませぬ。この窟のみなかみには、二本の桂の立木ありて、その根よりおのづから清水を噴き、末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫の桂と昔よりよび傳へてをりまするとと、お答へ申上げましたれば、おまへ様はなんと仰せられました。

頼家　非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありさうな……と、つい戯れに申したなう。

かつら　お戯れかは存じませぬが、そのお詞が冥加にあまりて、この願かならず叶ふやうと、百日のあひだ人にも知らさず、窟へ日參いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくへも知れぬ川水も、嬉しき逢瀬にな

がれ合ひ、今月今宵おん側近う、召出されたる身の冥加……。

頼家　武運つたなき頼家の身近うまゐるがそれほどに嬉しいか。そちも大方は存じて居らう。予には比企の判官能員の娘若狭といへる側女ありしが、能員ほろびし其砌に、不憫や若狭も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのまゝに若狭と云へ。

かつら　あの、わたくしが若狭の局と……。えゝ、ありがたうござりまする。

頼家　あたゝかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。戀をうしなひし頼家は、こゝに新しき戀を得て、心の痛みもやうやく癒えた。今はもろ〳〵の煩悩を斷つて、安らけくこの地に生涯を送りたいものぢや。さりながら、月には雲の障りあり、その望みも果敢なく破れて、予に萬一のことあらば、そちの父に打たせたる彼のおもてを形見と思へ。叔父の蒲殿は罪無うして、この修禪寺の土となられた。わが運命も遅かれ速かれ、おなじ路を辿らうも知れぬぞ。

（月かくれて暗し。籠手、臑當、腹卷したる軍兵二人、上下よりうかゞひ出でゝ、芒むらに潜む。蟲の聲俄にやむ。）

かつら　あたりにすだく蟲の聲、吹き消すやうに止みましたは……。

頼家　人やまゐりし。心をつけよ。

（金窪兵衛尉行親、三十餘歳。烏帽子、直垂、籠手、臑當にて出づ。）

行親　上、これに御座遊ばされましたか。

頼家　誰ぢや。

（桂は燈籠をかざす。頼家透しみる。）

行親　金窪行親でござりまする。

頼家　おゝ、兵衛か。鎌倉表より何としてまゐつた。

行親　北條殿のおん使に……。

頼家　なに、北條殿の使……。扨はこの頼家を討たうが爲な。

行親　これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺ひとして行親参上、ほかに仔細もござりませぬ。

頼家　云ふな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参入は、察するところ、北條の密意をうけて予を不意撃にする巧みであらうが……。

行親　天下やうやく定まりしとは申せども、平家の殘黨ほろび殲さず。且は函根より西の山路に、盗賊ども徘徊する由きこえましたれば、路次の用心として斯様にいかめしう扮装ち申した。上に對したてまつりて、不意撃の狼藉なんど、いかで、いかで……。

頼家　たとひ如何やうに陳ずるとも、憎き北條の使なんどに對面無用ぢや。使の口上聞くにおよばぬ。歸れ、かへれ。

（行親は騒がず。しづかに桂をみかへる。）

行親　これにある女性は……。

頼家　予が召仕ひの女子ぢやよ。

行親　おん謹みの身を以て、素性も得知れぬ賤しの女子どもを、おん側近う召されしは……。

（桂は堪へず、すゝみ出づ。）

かつら　兵衞どのとやら、お身は卜者か人相見か。初見参のわらはに對して、素性賤しき女子などと、迂濶に物を申されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕へし者ぞ。まして今は將軍家のおそばに召されて、若狭の局とも名乘る身に、一應の會釋もせで無禮の雑言は、鎌倉武士といふにも似ぬ、さりとは作法をわきまへぬ者なう。

（冷笑はれて行親は眉をひそめる。）

行親　なに。若狭の局……。して、それは誰に許された。

頼家　おゝ、予が許した。

行親　北條どのにも謀らせたまはず……。

頼家　北條がなんぢや。おのれ等は二口目には北條といふ。北條がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家來ぢやぞ。

行親　さりとて、尼御臺もおはしますに……。

頼家　えゝ、くどい奴。おのれ等の云ふこと、聽くべき耳は持たぬぞ。退れ、すされ。

行親　さほどにおむづかり遊ばされては、行親申上ぐべきやうもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまゝ退散、委細は明朝あらためて見參の上……。

頼家　いや、重ねて來ること相成らぬぞ。若狭、まゐれ。

（頼家は起ち上りて桂の手を取り、打連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。芒のあひだに潜みし軍兵出づ。）

兵一　先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合圖もござりませねば……。

兵二　手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親　北條殿の密旨を蒙り、近寄つて討ちたてまつらんと今宵ひそかに伺候したるが、流石は上様、早くもそれと覺られて、われに油斷を見せたまはねば、無念ながらも仕損じた。この上は修禪寺の御座所へ寄せかけ、多人數一度にこみ入つて本意を遂げうぞ。上様は早業の達人、近習の者共にも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取るな。場所は狭し、夜いくさぢや。うろたへて同士撃すな。

兵　はつ。

行親　一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控へたる者どもに、即刻かゝれと下知を傳へい。

兵一　心得申した。

（一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかゞひ出づ。）

春彦　大仁の町から戻る路々に、物の具したる兵者が、こゝに五人かしこに十人屯して、出入りのものを一々詮議するは、合點がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によつて、上様を失ひたてまつる結構な。さりとは大事ぢや。

（遠近にて寢鳥のおどろき起つ聲。下田五郎は橋を渡りて出づ。）

五郎　常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事ありげにも覺ゆるぞ。念のために川の上下を

一わたり見廻らうか。
春彦　五郎どのではおはさぬか。
五郎　おゝ、春彦か。
（春彦は近きてさゝやく。）
五郎　や、なんと云ふ。金窪の參入は……。上様を……。しかと左様か。むゝ。
（五郎はあわたゞしく引返しゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長巻をたづさへて出で、無言にて撃つてかゝる。五郎は抜きあはせて、忽ち斬つて捨つ。軍兵數人、上下より走り出で、五郎を押つ取りまく。）
五郎　やあ、春彦。こゝはそれがしが受け取つた。そちは御座所へ走せ參じて、この趣を注進せい。
春彦　はつ。
（春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。）

（三）

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。
（向ふより楓は走り出づ。）
かへで　父様。夜討ぢや。
夜叉王　おゝ、むすめ。見て戻つたか。
かへで　敵は誰やらわからぬが、人數はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討をかけましたぞ。
夜叉王　俄にきこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪寺へ夜討とは……。平家の殘黨か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大變ぢやなう。
かへで　生憎に春彦どのはありあはさず、なんとしたことでござりませうな。
夜叉王　我々がうろ〳〵立騒いだとてなんの役にも立つまい。たゞその成行を觀てゐるばかりぢや。まさかの時には父子が手をひいて立退くまでのこと。平家が勝たうが、源氏が勝たうが、北條が勝たうが、われ〳〵にかゝり合ひのないことぢや。
かへで　それぢやと云うて不意のいくさに、姉様はなんとなされうか。もし逃げ惑うて過失でも……。
夜叉王　いや、それも時の運ぢや、是非もない。姉には また姉の覺悟があらうよ。
（寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出でゝ心痛の體。向ふより春彦走り出づ。）
かへで　おゝ、春彦どの。待ちかねました。
春彦　寄手は鎌倉の北條方、しかも夜討の相談を、測らず木かげで立聽きして、其由を御注進申上げうと、修禪寺までは駈け付けたが、前後の門はみな圍まれ、翼なければ入ることかなはず、殘念ながらおめ〳〵戻つた。
かへで　では、姉様の安否も知れませぬか。
春彦　姉はさて措いて、上様の御安否さへもまだ判らぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花をちらして追つ返しつ、

今が合戰最中ぢや。

夜叉王　なにを云ふにも多勢に無勢、御所方とても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末ぢや。蒲殿といひ、上様と云ひ、いかなる因縁かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁みるなう。

（寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかゞひ見る。）

かへで　おゝ、おびたゞしい人の足音……。鎬（しのぎ）を削る太刀の音……。

春彦　こゝへも次第に近（ちかづ）いてくるわ。

（桂は頼家の假面を持ちて顔には髪をふりかけ、直垂を着て長巻を持ち、手負の體にて走り出で、門口に來りて倒る。）

春彦　や、誰やら表に……。

（夫婦は走り寄りて扶け起し、庭さきに伴ひ入るれば、桂は又倒れる。）

春彦　これ、傷は淺うござりまするぞ。心を確に持たせられい。

かつら　（息もたゆげに）おゝ妹……。春彦どの……。父様はどこにぢや。

夜叉王　や、なんと……。

（夜叉王は怪みて立ちよる。桂は顔をあげる。みな〳〵驚く。）

春彦　や、侍衆とおもひの外……。

夜叉王　おゝ、娘か。

かへで　姉さまか。

春彦　して、この體は……。

かつら　上様お風呂を召さるゝ折から、鎌倉勢が不意の夜討……。味方は小人數、必死にたゝかふ。女でこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面（おもて）をつけてお身がはりと、早速（さそく）の分別……。月の暗きを幸ひに打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼はり呼はり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩さじと追つかくる。

夜叉王　さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、こゝまで斬拔けてまゐつたか。（血に染みたる假面を取りてぢつと視る）

春彦　我々すらも侍衆と見あやまつた程なれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かへで　とは云ふものゝ、淺ましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。（取縋りて泣く）

かつら　いや、いや。死んでも憾（うらら）みはない。賤が伏屋でいたづらに、百年千年生きたとて何とならう。たとひ半晌（とき）一晌でも、將軍家のおそばに召出され、若狭の局といふ名をも給はるからは、これで出世の望もかなうた。死んでもわたしは本望ぢや。

（云ひかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は假面をみつめて物云はず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ來る。）

僧　大變ぢや、大變ぢや。かくまうて下され、隱まうて

くだされ。（内に駈入りて、桂を見て又おどろく）やあ、こゝにも手負が……。おゝ、桂殿……。こなたもか。

かつら　して、上様は……。

僧　お悼はしや、御最期ぢや。

かつら　えゝ。（這ひ起きて屹と視る）

僧　上様ばかりか、御家來衆も大方は斬死……。わし等も傍杖の怪我せぬうちと、命からゞ逃げて來たのぢや。

春彦　では、お身がはりの甲斐もなく……。

かへで　遂にやみ〳〵御最期か。

（桂は失望してまた倒る。楓は取付きて叫ぶ。）

かへで　これ、姉さま。心を確に……。なう、父様。姉さまが死にまするぞ。

（今まで一心に假面をみつめたる夜叉王、はじめて見かへる。）

夜叉王　おゝ、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もまた本望ぢや。

かへで　えゝ。

夜叉王　幾たび打ち直してもこの面に、死相のあり〳〵と見えたるは、われ拙きにあらず、鈍きにあらず。源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき御運とは、今といふ今、はじめて覺つた。神ならでは知ろしめされぬ人の運命、先づわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ。伊豆の夜叉王、われながら天晴れ天下一ぢやなう。（快げに笑ふ）

かつら　（おなじく笑ふ）わたしも天晴れお局様ぢや。死んでも思ひ置くことない。些とも早う上様のおあとを慕うて、冥土のおん供……。

夜叉王　やれ、娘。わかき女子が斷末魔の面、後の手本に寫しておきたい。苦痛を堪へてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。

春彦　はつ。

（春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち來る。夜叉王は筆を執る。）

夜叉王　娘、顔をみせい。

かつら　あい。

（桂は春彦夫婦に扶けられて這ひよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模寫せんとす。僧は口のうちにて念佛す。）

――幕――

（明治四十四年一月「文藝倶樂部」）